



館鼻則孝とコラボレーション作品 Photo by GION

## ■「館鼻則孝× 伝統産業事業者」コラボレーション作品紹介



小町紅 伊勢半本店

玉虫色に発色する紅で染め上げた館鼻則孝の代表作「ヒールレスシューズ」。



江戸木版画 高橋工房

空摺、正面摺、雲母摺という3種類の特種摺を用いて制作された木版画。



江戸切子 華硝

「米つなぎ」と呼ばれる華硝独自の紋様を用いて制作された立体作品。



江戸木目込人形 松崎人形

会場となった旧岩崎邸庭園の岩崎家の節句人形資料のデジタル復元彩色に取り組んだ。



和太鼓 宮本卯之助商店

雷神の背負う雷鼓と呼ばれる太鼓をモチーフに制作された立体作品。



木目金 杗目金屋

ヒールレスシューズのファスナートップを透かし彫りが入った木目金で表現した。



東京くみひも 龍工房

冠組(ゆるぎぐみ)で組まれた飾り結びが特徴的なヒールレスシューズ。



[特別協力] 金唐紙研究所

旧岩崎邸庭園の復元された壁紙である金唐草紙を用いたヒールレスシューズ。



江戸東京リシンク展スペシャルムービー

## ■コラボレーション作品を解説するスペシャルムービー

展覧会ディレクターを務める舘鼻則孝氏によるコラボレーション作品の解説。作家として舘鼻則孝氏が、いつも自問している言葉の裏には“Rethink”という基本的な考えがあります。それは“Old meets New”と同様に、「伝統と革新が交錯する」ことを意味する言葉でもあり、本展覧会においても、最も大切な構成要素となっています。



## ■オンライン展覧会 スペシャルサイト

スペシャルサイトでは、展覧会の概要からコラボレーション作品の詳細まで、本展の全貌を公開しています。また、会場となる旧岩崎邸庭園の魅力的な建築空間も合わせてお楽しみいただけます。

スペシャルサイト <https://edotokyokirari.jp/exhibition/>





## ■「江戸東京シンク展」に出展する伝統産業事業者の一覧



### 小町紅 伊勢半本店（こまちべに・いせはんほんてん）

1825年に紅を製造・販売する紅屋として創業。門外不出とされた秘伝の製法から作られる玉虫色の紅は、世界で唯一、江戸時代の製法そのままに作り続けられている。現在は小町紅などの本紅化粧品のほかに食紅、絵具の製造なども行っている。



### 江戸木版画 高橋工房（えどもくはなが・たかはしこうぼう）

安政年間(1854年～1860年)に創立し、現在に至るまで伝統の木版画の制作を続けている。初代から継承する「摺師」としての技術と、作品を総合的にプロデュースする「版元」としての幅広い知識と感性を活かし、商品の企画から制作までを行う。



### 江戸切子 華硝（えどきりこ・はなしょう）

1946年の創業以来、常に前進し新しいものづくりにチャレンジし、現在では、国賓の贈呈品やサミットなどの国際会議などの記念品として選出されている工房。カットから磨きまですべて自社の工房で行っており、デザインもすべて職人が生み出している。



### 江戸木目込人形 松崎人形（えどきめこみにんぎょう・まつざきにんぎょう）

1921年創業の松崎人形は、節句人形を手がける老舗。現在は、三代目となる松崎光正氏の雅号である「幸一光(こういっこう)」をブランド名として伝統の技術を活かしたさまざまな人形づくりを行っている。



### 和太鼓 宮本卯之助商店（わだいに・みやもとうのすけしょうてん）

文久元年、太鼓店として創業。太鼓・神輿の製造・販売を中心に事業を拡大。創業以来、宮本卯之助商店は祭と伝統芸能の保存と発展を使命とし、祭の持つ人々を繋げる力、世界に誇れる伝統芸能という日本の佳き伝統の継承に貢献している。



### 木目金 柰目金屋（もくめがね・もくめがねや）

2003年に創業し、江戸時代に生まれた伝統工芸技法「木目金」を用いて、グッドデザイン賞をはじめ世界的なデザイン賞受賞の結婚指輪を、自社工房にて職人が一つ一つ手作りするジュエリーブランド。



### 東京くみひも 龍工房（とうきょうくみひも・りゅうこうぼう）

1963年に創業以来、組紐にあった糸づくりに始まり、染色・デザイン・組みまでを一貫して行う都内で唯一の工房。伝統的な組紐だけでなく、先代から受け継がれてきた技術とノウハウから組紐を進化させる商品開発も積極的に行っている。



### 【特別協力】 金唐紙研究所（きんからかみけんきゅうじょ）

江戸時代にヨーロッパから渡ってきた、金唐革と呼ばれる装飾革を和紙を用いて日本国内で模倣することから始まった金唐紙の復元に従事する研究所。重要文化財「旧岩崎家住宅洋館」や、重要文化財「旧日本郵船小樽支店」などの修復工事に携わっている。

## ■館鼻則孝(たてはなのりたか)氏 プロフィール

1985年、東京生まれ。歌舞伎町で銭湯「歌舞伎湯」を営む家系に生まれ鎌倉で育つ。シュタイナー教育に基づく人形作家である母の影響で、幼少期から手でものをつくることを覚える。2010年、東京藝術大学美術学部工芸科染織専攻を卒業。遊女に関する文化研究とともに、友禅染を用いた着物や下駄を制作する。「イメージメーカー展」(21\_21 DESIGN SIGHT, 2014)、「Future Beauty」(東京都現代美術館 ほか国際巡回, 2012)、個展「呪力の美学」(岡本太郎記念館, 2016)、個展「It's always the others who die」(POLA Museum Annex, 2019)、個展「NORITAKA TATEHANA: Refashioning Beauty」(ポートランド日本庭園, 2019)他、ニューヨーク、パリ、ベルギーなど世界各地で作品を発表。また、2016年3月にパリのカルティエ現代美術財団で文楽公演を開催するなど、幅広く活動している。作品はメトロポリタン美術館、ヴィクトリア& アルバート博物館などに収蔵されている。



館鼻則孝氏 Photo by GION

## ■館鼻則孝氏 コメント

江戸東京きらりプロジェクトのコンセプトである“Old meets New”。

東京には、江戸、明治、大正、昭和、平成、令和の時代にまで続く、数多くの「老舗」が存在しています。そして、そこにはさまざまな技、文化、伝統が息づいている。そうした東京の魅力を国内外に伝えたいという思いからスタートしたのが本プロジェクトになります。今回、その活動の一環として開催される「江戸東京リシンク展」に、私は、作家としてだけでなく、展覧会ディレクターとしても参画しています。私はこれまで“Rethink”という言葉を冠した展覧会をいくつか開催してきましたが、本プロジェクトのコンセプトである“Old meets New”と“Rethink”という概念は多くの共通点を有していると考えています。“Rethink”が意味するところを簡略化して言うなら、途切れることなく続く日本の伝統、あるいは文化を、現代においてそのまま再現するのではなく、現代的な意味を加えて表現するということです。そのため、私の作品はすべて、日本のこれまでの歴史、文化があってこそ、成立しているとも言えます。その点において、“Old meets New”と“Rethink”は同義であり、だからこそ、これまで数多くの伝統工芸、伝統芸能とコラボレーションする形で、過去と現在をつなぐ活動をしてきました。時代は変わっても変わるべきでないもの、時代が変わるからこそ変わるべきものを見極め、伝統を次の100年に残していくために、今、私たちが何をなすべきか。伝統をどう現代的な意味づけをして打ち出していくか。今回の展覧会は、東京の魅力を伝える場であるとともに、私たち自身がリシンクするための機会でもあるのです。